令和元年２月１４日(金)　１４：００～
諏訪市役所　大会議室

第３回　諏訪地域の高校の将来像を考える協議会　議事録

次　　第

１　開　会

２　会長挨拶

３　協議事項

⑴　地域産業界からの意見・希望
（原村・富士見町・茅野市・諏訪市・下諏訪町・岡谷市の順番）

⑵　補足説明

４　委員相互の意見交換

５　その他
・第４回日程　　日　時　　令和２年４月３０日(木)　午後２時から
　　会　場　　諏訪市文化センター　第一集会室

６　閉　会

【議事録】

1　開　会　　全体進行（事務局）

・会議は公開　マスコミ各社、一般傍聴希望者を認める（傍聴者７名）

・欠席者

（敬称略）茅野市教育長　山田　利幸

岡谷市金属工業連合会　会長　木下　敏彦

諏訪地区連合ＰＴＡ連合会　会長　雁木　周平

諏訪地域振興局長　小野沢　弘夫

以上４名

・資料確認

①協議会次第　②地域産業界からの意見・希望等について

（諏訪市教委）改めてこの協議会のミッションを確認させていただきます。長野県教育委員会へ提出する、この諏訪地域の意見書を取りまとめていくということです。前回の会議でも、ご理解を頂いた通り、地域の意見を伺うカテゴリーとしては、ひとつには産業界、それからＰＴＡ、これから高校生となっていく子どもたち、また、同窓会、地域といったカテゴリーの皆さんを想定して、これから意見交換を行っていく訳であります。また、最後には、意見書案をまとめた骨子のパブリックコメントを実施し、市民・地域の皆様のご意見を伺っていくという流れを、前回の会議で確認をさせていただいたところであります。そこで、本日はその第一弾として産業界の意見について取り上げてまいりますので、もう一度全体像を確認させていただきました。

2　会長挨拶

○会長　　金子ゆかり　諏訪市長

第３回の高校改革協議会ができますこと感謝申し上げます。県内各地でこのような考える会は、旧通学区、ブロック単位で行われてきていますが、現状、上伊那地区がすでに協議を終えて、意見書を提出したことはご承知のことと思いますが、引き続き、岳北、佐久、南信州の３地区も協議を終えて、先月中に意見書を提出したと聞いています。私共のこの旧第７通学区の諏訪地域におきましても、多くの皆様の御意見を伺いながら、協議会の意見をまとめて提出していきたいと考えています。本日は産業界からの皆様からのご意見を中心に、意見聴取を行ったものがお手元に届いていると思いますが、これを基に意見交換をしていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

3　協議事項（進行　会長）

(1)「地域産業界からの意見・希望」の説明

(司会)　お手元の資料は、高校の将来像について、地域の産業界からの意見聴取したものです。地域産業界からの意見集約につきましては、本協議会の幹事会において、地元産業界を代表する方々や各団体などから意見聴取を行ったことは、先ほどの説明の通りです。市町村別に聴取した内容を取りまとめていただいき、事前に配布資料としてお手元に郵送させていただいてあります。これから、資料の中身に添いまして、各市町村の担当課長から概ね５分程度で、意見集約した内容をご説明いただきたいと思います。説明の後に、本協議会に産業界選出の方々もいらっしゃいますので、必要に応じて補足説明をしていただき、それらの内容を基に、委員相互の意見交換をして行きたいと考えています。

それでは、「地域産業界からの意見・希望」について、原村・富士見町・茅野市・諏訪市・下諏訪町・岡谷市、この順番でお願いしたいと思います。

原村教育委員会こども課長　三澤　光晴(資料Ｐ１)

原村では、主に商工会と農業委員会の役員の方々からご意見をいただいた。意見の方は、農業の方が主体となった意見となっている。まず、一番目の地域産業の特性・課題・可能性などですが、農業が主力産業であります。観光業は個人事業主の営業であり、現在は事業主の高齢化とともに廃業という傾向が強くなっている。また、農業については、「重い、汚い、疲れる、休みがない」があり、現実は高齢化、後継者不足という形になっておりますが、農業経営の形態も変化してきており、地域の特性を生かした産業の一つともなってきている。また、農業への憧れや自然回帰の意識の高まりなどにより、若者の就農希望者が増加してきている。多くはないが、そういった方もおられるという状況になっている。

２番目の産業界として、これから求める人材とその能力ですが、温暖化による気候変動等、ＩＴというと色々な考えがあるが、生産管理、自然環境を意識した高度な専門性と課題を解決するため、粘り強く取り組むことのできる、意欲とスキル、ネットワークを有効に活用できるコミュニケーション能力、人とのつながりをきちんとできる人材が大切だと思っている。また、人としての受け答えやきちんと挨拶ができる等、当然の事にはなりますが、そういったことがきちんとできる人材になって欲しい。また、色々な経験を身に付けてきて、それを基にしっかりとした職業人になって欲しいという意見もありました。

３番目のキャリア教育など、将来の社会人を育てるために高校教育に期待することですが、高校においては、農業の分野に入ってくるきっかけ作りというところをお願いしたい。また、基本的な学びとして、自ら調べて努力するということは必要である。こういったことを期待している。

４番目の地域の人材として高校教育に期待することでありますが、高校の先生方についても、積極的に地元の企業等、産業に理解をしていただいて、生徒に情報提供をして欲しいということや、生徒に対しては、地元の産業の魅力を、実体験を通して感じられる機会が欲しいということでした。

５番目の、どのような高校が必要かというところですが、地区外で学ぶ生徒が増えているという現状がありますが、生徒のニーズに合った、また相応のレベルと柔軟な学び方ができる学校が欲しいということで、観光系統の教育が受けられる高校が欲しいということもある。

その他自由意見の関係になりますが、高等教育においては、諏訪地域だけで完結できることではないので、首都圏や他地域で学んで諏訪に戻ってくる準備ができるような高校が欲しい。また、基本的な学習、生活習慣ができる人づくりが大切であるということ、また、反面、他地域に行くのではなくて、地域内の高校に進学できるように考えていく必要があろうという意見もいただいている。

富士見町教育委員会子ども課長　植松　高光(資料P2)

まず、富士見町ではＪＡ信州諏訪に対して意見、希望を求めた経過があります。これは、産業界からの委員の選出につきましても、偏りのない選出をということがあり、富士見町では農業委員会から委員をお願いした経過があります。そのこともあり、農業関係団体といえば、ＪＡグループではないかという思いがあり、農業立村の原村さんにもご相談申し上げる中で、富士見町の方から、当協議会にＪＡの意見を繋げる役割を富士見町が少し果させていただく事のご了解をいただきました。また、諏訪市の事務局の方にもご了解をいただく中で、ＪＡに照会を掛けさせていただき、それを含めて報告させていただきます。

１番目の関係ですが、諏訪地域は産業的には非常にバランスが取れているのではないか、ただ都市部と比べると、一部産業に弱さが見えつつあるのではないか。もう１つ農業関係では、標高差を活かした県内でも有数な農業産地であり、セルリは日本一である。また、その他の作物においても多岐な農業経営が行われています。近年は、気象変動が激しく、生産活動に様々な支障が出ている訳ですが、産地維持の努力を図っています。また、生産者の高齢化、後継者不足も叫ばれているところでありますが、積極的に就農支援を行うことで、総生産量は維持できている状況です。

２番目です。求める人間の姿としましては、やはり、基礎的なことは、学生時代に習得するのは当然でありますが、専門的な知識まで余り深く高校時代に、あるいはそれより上の時代に求めようとしても、やはり人間が出来ていなければ駄目だということであり、他者との協働、協力しながら自己の能力を伸ばそうとする姿勢を育んで欲しい。また、農業については、単に一産業に留まらず、農村地域や国土保全のための重要な産業であるということを、高校生の時代から理解していただきたい。そのための教育に期待しています。

３番目です。高校生は、とかく学校で学ぶということが多い訳ですが、高校時代から就労経験のインターンシップ制度があっても良くないか。それも長期休暇等を使って、一定程度確保できたらいいなというご意見もある。また、私どもからＪＡに依頼した際に、例えば、「農業は、今や国際競争力の時代ですね。」ということを申し上げた経過がありましたが、ＪＡさんからの意見としては、「競争に勝つことばかりではなく、まずは、人との協調性を養う教育を高校時代に行って欲しい。」と言っています。人間形成が大切なんだということです。声高に国際競争力が叫ばれるけれども、やはり人と人、人と自然や大地との調和が産業の源ではないかというご意見でした。

４番目です。ここで生活している人々が居るのは、まさに郷土愛があるからであり、地域の良さを見出して、興味を抱く事が必要になってくる。それも、学校だけでどうにかしようとしないで、是非、学校と地域が協力して、子どもたちを育成していく必要があるのではないか。ＪＡからは瑞穂の国の根幹である地域愛の食、農の大切さを是非身に付けて欲しいという期待があります。

５番目です。どのような高校が必要かということについては、専門的な職業校が今後必要だと考えていくと、専門職業校を一つにまとめる案が出てくるのではないかと思われるが、特に、農業高校については、農地や実習施設の確保が課題になってくるのではないか。また富士見町商工会からも、商工会の立場ではありますが、やはり実習環境の施設、用地等の懸念があるということで、改めて統合することを良しとせず、必ずしもそれが効率的とは言えないというところも、ご検討をいただきたいとのことでありました。JA さんからは、是非職業科の存続をお願いしたいということです。

その他として、探求的な学びについては、大いに賛成であるが、それよりも上の教育段階に進む過程において、果たして受験生がその能力を正しく評価される体制が、整備されていくのかなという心配の声もあります。

茅野市教育委員会学校教育課長　五味　正(資料P3)

①に関しましては、特徴、特性として、産業構造は、電気機械を主体とした製造業を中心に、八ヶ岳や蓼科高原など、自然環境を生かした観光業、地域の暮らしを支える商業、八ヶ岳山麓の農耕地や森林資源を生かした農業、林業、田舎暮らしに適した移住地推進など、各産業がそれぞれの特性を活かして成長している地域になります。

地域の課題でありますが、少子高齢化や人材の首都圏流出による働き手の確保、また、介護や建設業などの、地域の福祉や生活インフラを支える業種の労働力不足等が課題となっています。また、国際化に対応した専門性の高い人材確保も同様です。次に、地域の可能性ですが、茅野市だけでなく諏訪地域となりますが、内陸の地方都市でありながら、日本貿易振興機構の支社や税関の出張所があり、地域産業と国際貿易が直結している地域は全国でも珍しいと考えています。また、八ヶ岳山麓の広大な自然フィールドをステージとした技術実験地としての可能性を有しているとも考えています。

次に②番であります。求める人材とその能力でありますが、グローバル化に対応した人材。また、会社、集団において意思疎通し、協調して業務を遂行する社会人基礎力を持つ人材等々です。資料①から⑧まで、必要な能力を書かせていただいております。

次に③です。高校教育に期待することですが、地域産業や地域資源の探究的学習及び多様な社会体験を実現する教育課程の整備と人材の配置が必要であると考えています。また、地域活動やイベント、ボランティア活動への高校生の参加、社会人として最低限守らなければならないルール、マナー、モラルを認識し、理解できるような教育の機会を期待しています。

④番ですが、就職するために高校教育に期待することですが、国や地方自治体によるインターンシップ促進補助メニューの充実、また「地方には仕事がない」という漠然としたイメージがあることから、キャリア教育の際に、業種に偏らず全体を俯瞰し、輝く事業者の紹介を是非していただきたいと考えています。

⑤番ですが、諏訪地方にどのような高校が必要かという問いですが、地域に密着した、地域と繋がりをもった高校が相当かと考えています。また、土木、観光で即戦力となる、また、ＩＴ関連の人材を輩出できる技能学科を持った高校、家庭事情など様々な状況に応じられる選択肢を確保していくためには、最低限の学力と社会人基礎力の教育はいずれの高校でも確保しつつ、個人の希望に応じて進学と専門性の深堀に対応できる体制整備が必要と考えています。

⑥最後に自由意見となりますが、生徒自身が、就職先を自由に検討出来る環境づくりや地域の企業について知ってもらえるような取組を積極的に進めてもらいたい。白馬高校の国際観光科のように、日本や世界に目を向けた「グローバル」と、地域の「ローカリゼーション」の双方を視野に入れた教育を取り入れることで、世界に通じる人材育成を果たすとともに、地元の良さを認識して欲しい。期待したい。

諏訪市教育委員会教育総務課長　柳平　直章(P5)

諏訪市では、商工会議所のご協力をいただき、それぞれの方向にかかわるご意見などを伺いました。

まず、①ですが当市は、「ものづくりのまち」であるとともに、超精密微細加工業の集積地であり、部品産業のインフラがコンパクトにまとまっていることが、世界的に見ても他の地域にはない大きな特徴であるということ、それから「温泉を活かしたまちづくり」を進めるため、サービス業を伸ばす必要がある、そのようなご意見が出ていました。

②では、これから求める人材という部分では、「人が喜ぶことを素直にうれしい」と感じられ、相手に好印象を与えるコミュニケーション能力のある人材やグローバルな人材という意見があり、③番の高校教育に期待することについても、やはり基本的なコミュニケーション能力の育成を望むという意見が出てきています。

④番ですが、地域の人材が地元の地域産業に就職するために、高校教育の中で地元に希望を抱くような教育的機会を増やすことへの期待があげられました。

⑤番では、地域の教育環境が優れていることをセールスポイントとする事で、地域に住んでいる人だけでなく、全国から多くの人材が集まるような高校であったり、大学進学力がある学力優秀な高校が必要であるというご意見がありました。

⑥番のその他ですが、グローバルな人材が育つ教育環境の整備を期待するご意見、そして具体的に他地域でやっているようなこと、例えば、軽井沢にはアメリカンスクールがあり、帰国子女が学べる環境が整っている、そのようなご意見が出てきています。

下諏訪町教育委員会　教育こども課長　本山　祥弘(資料P6)

当町では下諏訪町商工会議所会頭に本案件について意見集約をお願いしました。

①の地域産業の特徴・課題・可能性についてでございます。課題としてあげられたのは、ものづくりに従事する若い人材の不足です。

②の産業界として、これから求める人材とその能力、専門性についてですが、多少のことではへこたれない頼もしい人材、ワールドワイドで活躍できるグローバル人材の育成、ＡＩ時代に対応できるソフトウェア人材の育成、ハードとソフトの両面に対応できる複合人材、コミュニケーション能力と行動力が高い資質を持つ人材、何に対しても好奇心を持つ人材であります。

③のキャリア教育など、将来の社会人を育てるために高校教育に期待することにつきましては、自ら考え行動できる自主性の高い人材を育てる教育、頭でっかちでなく、社会の中で自立できるタフで対応能力のある人材の育成です。

次の④ですが、地域の人材が地域産業に就職するために、高校教育に期待することでは、地域の地元産業に対する理解を高める授業、地域企業に対するインターンシップの充実、諏訪東京理科大との連携の強化であります。

⑤の産業界の立場から諏訪地域にどのような高校が必要かでは、ソフトウェア、ＡＩ等に強い人材を育成する学校、理系に強い人材を育成できる学校です。

最後、⑥のその他自由意見としましては、普通高校の中にも、学校ごとの特徴付けが必要になっている。どのように学校ごとの差別化をし、学生に興味や関心を持ってもらえるようにするのかが課題であるというご意見をいただいています。

岡谷市教育委員会　教育総務課長　両角　秀孝(資料P7)

重複部分がありますので、主な要点ということで説明をさせていただきます。当市は、基幹産業であります製造業、それを支えます商業のそれぞれの方々から意見聴取を行いました。

①の地域産業の特徴、特性については、立地や製糸産業の歴史、その後の光学や精密産業で世界をリードしてきた地域のイメージが今も強みとなっている。また製造業に関して、中小規模の業種、業態が集積し、製造が地域内で完結できることが地域の優位性となっているという意見をいただいている。それから、地域産業の課題、可能性については、製造業者、従事者の減少が進んでいる。若年者の労働力の流出により、産業界の衰退が進むという、負の連鎖になっているという意見もいただいている。更に、経営者の高齢化から、後継者となる意欲やスキルを持った人材を育てる必要がある。地域では、地域に戻り経営を継ぎたい、事業をしたいという人材を望んでいるという部分がある。それから、地域に魅力を創出する工業系ハード分野に限らず、ソフトやエンターテイメント関連など魅力ある産業や企業を育てていくことで、若年労働層が地域に留まりたい環境づくりをしていく必要がある。

商業の方は、ＳＮＳの普及環境が変化し、店舗を構えなくても商売ができるなど、意欲があればいろいろな可能性やチャンスがあるというご意見もいただいた。

次に②のこれから求める人材については、基本的には各高校が教育目標で掲げているものと同様という意見もあった。コミュニケーションやプレゼンテーションなど使える対応力が必要である。また専門性では、ＩＴ化、グローバル化が保障され、プログラミング等のＡＩ化が加速度的に進化していく中で、ソフトエン

ジニアの有用性も増している。言語は基本的には英語ということで、コミュニケーション能力とグローバル化に対応できる人材が極めて重要という意見もあった。基幹産業が工業であれば、工業高校は大切である。少子化などが進む中、そのスキルを育てる学校は今以上に必要になってくる。商業界からはＳＮＳの普及など経営側も、お客さん側も環境が大きく変化している。学校での教科の学習だけでなく、実学のことを学ぶ場も必要であり、生きる力のある人材が必要ということでありました。

次に③のキャリア教育などの区分ですが、高校教育のみならず、小中を経て高校に至るまでの 12 年間をより厚みのあるものにして欲しい。卒業後、就職を希望する生徒には、インターンシップの柔軟な運用と、そのような機会や時間を増やすべきという考えもある。また、進学をする生徒には、ボランティア活動等の参加機会を増やして、グループワークやプレゼンテーションを通して、地域社会との関わりを深めていく教育を期待している。体験学習など、事業者と高校とアイデアを交換できる場があればというご意見もある。進学、就職さまざまであるが、高校は社会に出る準備ができる学校であることが大切である。

次に④の、地域の人材が地域産業に就職するために期待することは、地域学習などの時間を活かして座学だけでない質の高い授業を期待する。それから、若手経営者などを授業に招いて、地域への関わり、深い関わりと愛着を持たせて欲しい。それから、地元を離れた学生に対しては、地元の情報を随時発信することが大切ではないかということもいただいている。インターンシップに柔軟性を持たせ、企業側にも適度の仕組みをして欲しいとの意見もいただいている。

⑤の産業界の立場から、諏訪地域にどのような高校が必要かということですが、ソフト開発やインターネットを介したビジネス等の広範なデジタル、ＩＴ関連を教える専門高校、それから教える側の教員、講師についても実地経験をしている専門の人材を望む意見もあった。それから、地域に戻って経営を引き継ぎたい、後継者や起業したいという人材を望むというところで、教科だけでなく、実際の経営などを学ぶ場をつくっておく必要がある。高校任せではなく、地域と連携してどの学校も取り組んで欲しい。時代の最先端の学びの場を職業高校だけでなく、全ての高校でも必要でないかと思います。押しつけではなく、自ら考え行動できる高校であって欲しいという意見もありました。

最後に、自由意見ですが、ソフト関連やＩＴ関連の産業では、従来は基礎学力がしっかりしていれば、企業で専門教育をすれば戦力として人材を育てられたが、現在の企業にその余裕がなく、企業の教育の低下が顕著であるという受け止めもされている。産業界では、この分野での即戦力が必要であり、従来の教育システムでは、世界の流れについて行かれないという企業の中で、早い段階から即戦力となる人材を地域で育てていく環境と仕組みを築いていけば、地域の産業にとっても有益である。また、この分野で多くの起業家を輩出すれば、地元に人を呼び込む優位性も出来るのではないかと考える。

別に、不登校の生徒の受け皿となる学校も必要ではないかというご意見もある。学校ではパソコンやＩＣＴ機器の授業が進んでいくと思うが、アナログ的な要素も大切である。また単に人数を増やすだけの統合ではなく、魅力ある学校になって欲しい。また、勉強ができるというだけではない、子どもの可能性を引き出す学校が必要です。

(2)　**質疑応答**

発言者	内　　容
司　　会	只今の説明がありました各市町村の地域産業界のからの意見、希望ということについて、本日産業界の委員の方々もご出席いただいておりますので、補足説明等ありましたらご意見をいただきたいと思います。
委　　員	私が取りまとめたものですが、一点書き忘れたと思われることは、今後の高校教育の中で、基本的なところがまだ出来ていないというお話があったかと思います。私としても社会道徳というところが今の若い方はちょっと、道徳的な基本的なところがなかなか、家庭とか

	いろいろな所で教育をされて来ていないということが、非常に多くあります。とにかく当たり前のことは当たり前に出来る、という基本的な社会常識をしっかりした上で、資料に、書かせていただいているように、個性を伸ばすような、本当に理系に強い人材とか、いろいろな人材が沢山いると思います。そういった子どもたちの個性をいかに、見付けて伸ばしていくかという、難しいことだと思いますが、そういったところにしっかり目を付けてやると、産業界というのは、いろいろな面で戦っている訳で、海外との関係でも、そういう人材がたくましく戦って行けるようなそういう人材をつくっていかなければならないということを感じている。
委　員	この中に表れている通りだと思いますが、地域によっても、産業の特性だとか、時代の変化とか、時代によっても作られるものが色々と変わってくる訳であります。そういうことを加味しながらの教育が必要ではないでしょうか。それと同時に、先ほどお話がありました通り、非常に地球が小さくなって、海外との取引が非常に増えてきています。どうしても、公用語の英語が必要となる。いろいろと英会話ができる人材の教育が必要となってくるのではないかと感じている。
委　員	我々商工会議所のメンバーが、複数で書いてあります。個人的な見解として、高校という観点で人材を呼び込むという面で、少し異質な意見を申し上げたいと思います。今、諏訪市で一番雇用人数の大きな事業所は、諏訪赤十字病院で、1,000 名余りいる。お医者さんも、あそこに越して来た時は 50 名だったのが、今は 100 名を超えているという状況になっている。二番目に多い事業所が諏訪市役所で、三番目がエプソンで、もう 300～400 名しかいないという状況になっているかもしれませんが。今、諏訪市はそういう意味で医療の先進地として、日赤を中心とした人材確保ということを、一度みんなで言ったことがあるのです。諏訪赤十字病院が、今後もずっと今の体制を維持して行くには、若いお医者さんを次々と呼んできてもらわなければいけない。そして、お医者さんに来てもらうには、どうしたらよいかというと、その奥様に「諏訪にいっても良いわよ。」と言わせなければいけない。お医者さんの奥さんに、「諏訪にいっても良いわよ。」と言わせる一番の力は、そこに行けば子弟の教育ができるかどうかが一番の問題で、だから日赤の元院長に言わせれば、諏訪の教育水準をもっと上げてもらわないと、日赤が次のお医者さん呼んでこられない。そうすると困ってしまうことになる。住み易い町をつくるということもありますが、エプソンがかつてそうであったように、優秀な人材を諏訪に外から呼び込むには、教育水準という視点を諏訪に付けていかなければならないと思う。高校再編という理由と山梨や松本に行かなくても良い水準の高校が諏訪にないと困りますねと言いたい訳です。
委　員	特別にはないのですが、皆さんもいろいろな教育の要望がでているのですが、先般の高校の方針といいますか、伺ったところによると、それなりのことをやっているように、かっこよく書いてある。だから、現実の公教育が本当に物足りないのか、実態が分からないが、自分で自ら考えるという教育はやっているのではないかなと思っています。いまだに産業界等からこのような要望が出てくるので、ちょっと今の高校の現実がよく分からないので…
司　会	今できていないので要望を出しているというのではなくて、これからの超少子化で学生数も減っていく中、県立高校の適正配置、再編を含めたものにシフトするのにあたって、改めて高校の中身として維持していっていただいたり、ここは守っていただきたいという希望を聞き取ったというところです。今、現状がそうでないからということではなくて、それもあるかもしれませんが、新しく出来上がる新たな高校において、期待することを聞き取っ

	ているという風に捉えていただければと思います。
委　員	人口が減るのは目に見えているのですね、全国的に。富士見町も20年もすればもう、1万人を切ってしまうというとんでもない状況。そうなると、高校の再編、統廃合は明らかなことなので、その中で、どうやって行くのかということが入ってこないと困る。もう長野県の方針もほぼ決まっていると思うので、そういった中で、専門校をどうするのか早く知らしめて、意見を伺った方が、色々な論議が早く進むのではないでしょうか。裏で、こそこそやっていて、ポッと出されたら、もう不満タラタラというのが大体のパターンで、政府とかを見ていても、小出しにしないで出すことが必要ではないか。そうすると皆さんが考えるのではないか。我々、こういう限られたメンバーだけでは、そんなに色々な意見は出てこないと思うので。
委　員	私は今、ブルーベリー・ファームを始めています。10 年前に原村に戻り、始めている。以前は教員をしていた。帰って来て思ったことは何かというと、農業をやるのでも、非常に複雑になってきている。だから畑のこと、土のこと、作物のことが分かっても、生業としてやっていくことは非常に難しい時代になっている。例えば、野菜を作っても、それをどうやって売るのか考える。今よく言われている国際競争力も独自産業化もそうですが、非常に複雑になってきています。ということは、たとえば、今、富士見高校にある園芸科もそうですが、従来の専門学科といわれている形で、教育を子どもたちに行なって、卒業した段階では社会に通用するかもしれないが、それから先は果たして通用するのか、極端な話ですが。ですから、そういうところを地域として、どんな重点施策を取りながら、高校を再編していくかを考えて行く必要があるのではないかと思う。 それと同時に、諏訪の特性として、子どもたちは高校を卒業した段階で、ほとんどの子たちが、学びの場を求めて外に出ていく訳です。そして、戻ってこなかったら諏訪はドンドン衰退していくことになります。魅力ある諏訪であり続けることを、高校の中でいろいろな体験を通して、感じさせるようにして行くと同時に、しっかり学んで、本当の力を身に付けて戻ってくるような、そういう基礎をしっかりつくっていくことが大事ではないかと感じています。 もう一つ、私の友達が、以前話していたのですが、その彼は工業高校を卒業しまして、エプソンで随分活躍した人ですが、その彼と話をしていて、今の若い人たちで、今本当にものづくりで求めている人間は、ロボットをやった人間だというのです。ロボコンなどに参加した人間を、今すぐに求めているといいます。要するにロボコンの、そういう大会に参加するための基本的なスタンスが総合力なのですね。要するに、技術力だけでは対応できない。あの状況に対してどう対応していけるか、それを修正して新しいものを作っていくか、そういう総合力です。それが今の企業にとって求められているものだと言っていました。ですから、そういったベースとなるものを作っていけるような、そういう視点に立って、高校の将来を考えていった方がよいのではないかと考える。

(3)　**意見交換**

発言者	内　　容
司　　会	補足意見として5名の方からお話をいただいた。それでは、発表いただいた6市町村プラス産業界の皆さん、それを含めてでも結構ですので、この後、この地域として、産業界からの新しい高校に求めるものを意見書に盛り込んでいくことになりますが、そのための意

	見交換をしていきたいと思います。委員の皆さんからご発言をいただきたいと思いますが、いきなり言われてもということで、例えば、今まで 6 つの市町村から出された意見の中から、共通してでてきた、キーワードのようなものがあります。例えば、基本的なコミュニケーション能力、基本的な知識、技能、社会性、人間性というか、挨拶ができるとか、相手の言うことをしっかり聞けることであったり、これからは、グローバルに対応できたりする人材が必要だったりというようなお話を、幾つかの市町村や産業界の皆さんからいただきました。是非ここはというご意見を皆様方からお伺いしたいと思います。
委　　員	・コミュニケーション力、グローバル人材という観点からお話させていただきたいと思います。やはり、コミュニケーション力は、総じて若い人たちはうといと思います。逆に、すごくそういったことに臆せず、どんな場にも出ていく子どもたちも少なからず居ることは感じています。この間、中学校の校長先生方から聞いたお話では、私学は特にそういったところに力を入れて、プレゼンテーション力やコミュニケーション能力、あるいは海外に出て行くという、グローバルな見方をしている学校があるといった話も聞いています。私学にできて、公立にできないとは言わないですが、そういったところにこれからは大いに力を入れて行くべきだと思う。今回、資料を読ませていただいて、どこの地域もほぼ同じことが書いてあるなと感じました。コミュニケーション能力は非常に大事だと思います。我々商売をやっていましても、地域のお店をやっている、やはり人と人とのつながりで物を売っていくことが大事なので、その点でも、コミュニケーション、プレゼン能力というものは、もっともっと公立の学校でも取り組むべきという思いを持っています。
委　　員	・社会教育委員という立場から、少しお話させていただきます。皆さん産業界の方々から、知識とか、グローバルということと同時に、基本的なコミュニケーション能力とか、社会性がまず大事だよというお話をいただいたと思います。本当にその通りで、今、大人の私達さえも、中には社会力がなかったり、地域力がなかったりと、この地域をどのように良くしていこうという思いを抱くという大人の姿も、子どもの数も少なくなっている。社会人としてはきちんと企業に勤めて、生業として自分の食い扶持を稼ぐことは大事ですが、その前の段階で、人の生き方にとても流されてしまいやすい傾向があるのかなと思う。特に、ネット社会の上に、ウソの情報と分からないようにしても、ちょっと私達の感覚からすればアレッと思うようなことでも、高校生たちは、「だっていいね、こんなに沢山ついている。」「ここは、何万人もいる。だからこの人の言うことは正しい。」どんな情報が正しいか、正しい情報をきちんと選る能力であったり、先ほどお伝えしたように、社会性を育てることも大事なことだと思います。人の思いに共感できたり、共有できたりするということは、人がどういう風にそのことに対して思っているのかが分かっていいと思っている。 　私たちは、何十年か前に、高学歴の方々によるテロ集団の犯罪によって、とてもえらい目に合いました。考えると、勉強さえやっていれば良い、その裏にきちんとした想いとか、皆で幸せになろうとか、この地域を良くしていこうという考えがあって、学力だけを突き詰めていってしまうと、少し恐ろしいような気がします。何のために学ぶのか、何のために何を身に付けるのか、そして自分が幸せになるために何が必要になるのか、そういうところも考えていけるような高校生、高校でありたいと思っています。
司　　会	自ら考え、行動し、解決できる主体性を持った、自主、自立の確立、といったことをご指摘いただいたご意見と思います。皆さんから出していただいたキーワードとしては、生徒の求める多様なニーズにあった学力や、専門技能を学べる高校、理系など、ＩＡやインタ

	ーネット関連のその技術をしっかり付けていける知識、技能も育てて欲しいという意見もある。それにあたっては、インターンシップはどうだろうかとか、地域産業や企業に対しての理解を深めて欲しいというコメントも含まれていましたが、そうした側面を捉えてのお考えはどうでしょう。
委　員	・最初に、一大学人として、資料は参考になります。大学に入ったらこういう風にしているか、答えるかということで。実は、高校の問題と少子化は、多分根っこにあったんだと思いますが、大学も同じように少子化と言われて、それも問題だと言われていますが、実は私はちょっと違った考えを持っています。大学の最大の問題点は少子化よりも、きちんとしたニーズに応えていないこと。学ぼうとする学生さんのニーズに応えていない、社会のニーズに応えていない、ということが最大の問題であることになっている。高校は、もう少し基礎とかという話になると思いますが、そういうことが問題。先に自論として言わせていただきました。 今、多様なニーズの話でいいますと、高校生の方が、自分自身のニーズそのものを持っていなければというところを心配していました。こういうことをしたいということを、いかにサゼッションしてあげるのか、また、最後に岡谷市さんから、可能性を引き出す学校が必要だというご意見がございましたが、大賛成です。子どもの才能を伸ばしてあげて、可能性を見つけてあげるような場になって欲しいと思っている。 その時に、これは受け売りですが、某政府高官からの二つの想像力が必要だという話が印象に残っている。高校生が社会に出て活躍するためには、これからの社会がどうなるかを想像する。そこで、色々な問題点が見つかったら、それをどうやって解決するのか。クリエイティブの創造ですが。例えば、これから少子高齢化が進行すると問題が起こると考え、対策としては、ＡＩを導入することを誰か気が付くとか。少子高齢化が起こって、ＡＩ、ＩＯＴを入れて、ＡＩティーチャーを作ると言われていますが、人数だけでは釣り合ってしまうのですよ。労働人口が７割でＡＩが３割位労働を奪ってしまっているといわれています、職を奪っている。中学生もそうです。だから創造力が必要になる。どういう創造力かというと、これから大事になってくる、ＡＩ、ＩＯＴの人が、いわゆる製造業であふれた人を引き取ってくれる、それだけではだめなのです。ＡＩ、ＩＯＴを求めている人材は、もっと高度な技能を出して、いわゆる産業革命の時に起きたような、手工業が無くなった部分を産業界が引き受けるということにそのままではならなかった。そういう想像を考えた時、じゃあどうしたらよいのか。そこで、クリエイティブの方、いわゆるリカレント教育、高校でも大学でもどちらでもいいのですが、そういうリカレント教育をできれば、多様なニーズ、社会に対するニーズです。本人ではないです。社会に合うニーズに対応した教育なんかしていても、社会が変わってしまう。今、社会にある職業の内、多分高校生が大学を出る頃は、何割かないのです。そういう時代ですから、変わっていくような所に常に対応できるようにすることが、高校自身、大学の我々の役割かもしれません。そういうのが必要かなと思っています。あと一点、高校の統合ということになった時、近くの高校が無くなるというのは、本当に高校生から見ても問題ですか。ここの高校生は優秀だと、山梨、松本に行ってしまうんでしょ。そういう良い高校があれば、先ほど委員さんからお話がでましたけれど、良い高校があれば外に行かないですね。そういうことですと、統合して一部が無くなるという事態が本来は問題ではなくて、良い高校をつくること、どうやってつくるかがおそらく問題、それがニーズに応えるということだと思います。

	最後に、英語の話がでましたけれど、私、マレーシアからの留学生を一度教えたことがありますが、彼は英語が喋れるんです。英語を習っている時間は我々と対して変わらない。では、そもそも私が何で喋れないかというと、使ってないからです。高校なんかでも、実際に英語を使うような授業をやっていないと、おそらく使えるようにならない。難しいシェークスピアを読んで理解する必要はないのです。もっと簡単でネイティブに使うこと。彼らにどうしてそんなに出来るのかと聞いたところ、要するに英語で授業をしている。レポートは英語で書かなければならない。だから使っているのです。国際化というのは、英語が国際化とは思いませんが、英語が普通に簡単に使えるようになること、社会で使えるように高校で使うようにすることが必要だと思っている。恥ずかしながら、ウチの大学はやっていません。来年度から大学院の一部は、強制的に、英語でやってもらおうと思っています。同じ理由です、使わなければだめです。
司　　会	変革の時代の一大認識が必要だということ、行きたい高校をつくるということ、実践の教育ということでは、英語教育のみならず、産業界の皆様から、インターンシップとか、地域の現場向上、現場でも、実地、実践教育に対するコメントと捉えさせていだいた。
委　　員	・いろいろとコミュニケーションについてのお話がありましたが、基本的にコミュニケーションの関係を育んでいくのは、幼稚園から小学校、中学校にかけてだと思っています。ですから高校に行って、やはり学ばなければならないことは、地域で社会人として、社会に出てどのようにコミュニケーションをとっていくか、友達同士のコミュニケーションは、幼稚園、小学校、中学校十分にやっていただくことが本来の姿だと思っていますので、そういう部分で高校もやっていただければ良いと思います。 それで、いつもお話を聞いていると、工業系のお話なのですね。いろいろＩＴの関係とか。私は、育成会をやっていますが、食の関係をやっているので思うのですが、食も非常に大事で、たまたまこの諏訪には、農業高校が富士見の方にありますが、なかなか食に関わる学校がない、と言う意味で、今回は、高校を将来に向けて考え直す時に、もう一度今までの既成の高校の形ではなく、新たな職域に対応できる、子どもたちが体験、経験できるような、高校の学科を増やしていくことが必要ではないかという気がしている。先ほど委員さんが言いましたけれど、時間的にゆっくりと進んでいるんですけど、高校再編する頃には、皆さん定年になってしまったり、実際にその場にいない人間になってしまったりする。多分。ですから、県の流れが決まっていて、時間的に早く答えを出して、早くその他の人達とも話をして、形づくっていくということは、非常に大事なような気がします。
司　会	新たな職域というお話がありましたが、生徒が求める多様なニーズに合った、また、この後、生徒、児童の皆さんよりヒアリングを行う予定になっている。そのような積み重ねの中で、意見書をまとめて行きたいと思っている。
委　員	・高校の元教員で退職して 20 年になります。高等学校の教育というものは、今、実践教育といわれましたが、高等学校は 3 つの部位があるわけです。生徒会活動、生徒・生活指導、学習指導です。生徒会活動のクラブ活動の中で、例えばスポーツなんかは、考えるスポーツ、自分達で考えてやるスポーツが欠けているのではないか、富士見高校と茅野高校が 2 クラスになったということは、やはり 3 クラス以上はないと、クラブ活動はできないと思っています。ですから、そういう点では 2 クラスずつになったことは、非常に残念だと思います。

	次に生徒指導ですが、生活指導はやはり、善悪がきちんと分かる生徒をつくる、善悪の判断ができるような子ども達を育てていくことが大事で、そのためには、学年会でいじめなどを担任一人にまかせず、学年全体で把握していくことが大事。そういうことが本当に出来ているかどうかということが、今ちょっと分かりませんが。 それから、学習活動ですが、教科書をきちんとやっていかなければならない。私は昔、向陽高校が出来たばかりの頃、7 年間いて、最後 2 年いて 9 年いた訳ですが、向陽高校では、学年全体で生活指導をした。一人の生徒が問題を起こした場合には、担任の先生ばかりでなくて、学年の先生が一緒に関わるということ。生徒を育てるという意味では、そうやって行かなければいけない。教科指導のことですが、筆記試験、模擬試験というのはやはり、全員で話し合って問題をつくっていく。外部のものを使って、定期試験とかに使うのではなく、自分達で問題をつくってやる。そういう風にやはりやっていかないと、生徒の力はつかないと思っています。今までそういうのをやってきている。今、どのようにやっているか分かりませんが。ちょっと関係した点でお話しますと、教科指導がバラバラになってきている点で。私、数学が専門ですが、試験問題がみんな“かっこ”に入れる問題で、いわゆるアチーブテストみたいなもので、記述式がないのです。20 個出て、5 点で 100 点。ある問題で、一つの答えが 1/2 が正解だけど、「2/4 だっていいじゃないか。思考過程で、もしかしたら 2/4 が出ているかもしれないし、約さなくても、5 点満点だから 2 点ぐらいやっても良いじゃないか」と言ったところ、他の先生は黙っていた。私は、思考過程で他の答えが 1/2 は正しい、それは正しいかもしれませんが、2/4 も正しいので 2 点位やっても良いのではないかと言った。 現在の生徒たちが、本当にみんなで団結して、まとまってやっているかということをちょっと気にしている。バラバラであるかという点も。昔、課外活動には、全員が入ったんですが、今は何かバラバラな状態で、そういう点では、統一性が足りないのではないか。ある意味においては、全員が課外活動をやっていた方が、統一ができたのではないかと思っている。
委　員	・商業連合会の立場からですが、昨年、岡谷市長さんのご理解をいただきながら、岡谷市商業活性化計画というものをつくりました。いよいよこの間、本格的にスタートするというところに来ています。非常に近視眼的というかエゴイスティック的な発言と捉えられるかもしれませんが、あえて言わせていただきます。今の岡谷市の商業を活性化させるために計画を立てていますが、岡谷には 3 つの高校があります。1 つのある高校がもし無くなってしまったらと思うと、ゾッとします。今、現在は、生徒数が少なくなりつつある、これからどんどんと減るということは分かっていますが、今は、岡谷の 3 つの高校に数百人が毎日毎日地元岡谷から、あるいは諏訪から、あるいは諏訪以外からも通ってきている。そこには人の動きがあり、活気がある生活がある。そして、活力、あるいは商業がある。それが、ある日、消えてしまう、無くなってしまう。統廃合によって、3 つの学校が無くなってしまうということは、非常に地域にとっては痛い損失であることは間違いないと僕は思っています。その結果、そこに巨大な空家ができる訳ですね、まあ、県がどういう風に空いた高校を、何かに活用することを考えているとは思いますが、可能性としては、巨大な空家が出来てしまう。そこに、誰もいない、通わない、声もしないというものが出来てしまうということに、我々今、商業の活性化を考えている立場からすれば、非常に心配するところです。この会が、当然統廃合というものを前提に、想定して進めていくことだと思うのですが、是非それありきではなくて、むしろ最低でも、今の学校数を維持する

	んだと、そして、先ほどの委員さんがおっしゃっていた通り、もっと魅力のある学校にして、ここにもっと多くの子どもたちが通ってきて、そして、できればもう一つ学校を増やすことを目指す位の気持ちでやって行くべきではないかと、私の立場で言わせていただきました。
司　　会	お気持ちとして、伺わせていただきました。現実的には、子どもの数が減ってきている局面にありまして、そして、今の課題が持ち上がっているという考えでいきたいと思っています。個々の高校をどうこうという話は、今回の協議会が扱う案件ではありませんで、それを外して、これから高校に通う子どもたちのために、この地域にどんな高校を用意したら良いのかということがテーマで、話し合われていますので、参考意見として伺わせていただきます。 多くの皆様から発言していただきました中には、魅力ある地域であり続けるための施策が必要だとか、これは高校生よりか、我々の課題である。先ほどは、委員さんから、学校の中でどんな取組をするかという、学校の存在があった中で、そこに関わる先生や関係の皆さんが、どんな教育を具体的にするのかということは、今回のテーブルからちょっと切り離して、それも参考にしながらですが、いろいろな先生達の思いも背景に含みながら、この意見を取りまとめていきたいと思っています。 今日で終わりではなく、このあと、ＰＴＡの皆さんのご意見や、児童、生徒の意向や、同窓会、地域住民の方々からのご意見をテーブルに上げ、それを最終的にもう一度、整合をとる場面も、あろうかと思いますので、本日言い洩らしてしまったとか、やはりこれは、意見書の中に盛り込んで欲しいという意見がありましたら、機会を捉えて、ご意見をいただきたいと思います。

6　その他

・第４回日程　日時　令和２年４月 30 日（金）午後２時から
　　会場　諏訪市文化センター　第一集会室

7　閉　会（閉会のあいさつ）

（副会長）産業界の皆様からは、貴重な意見をそれぞれ集約していただき、提出していただきましたことに、心から感謝申し上げます。繰り返しになりますが、結論ありきではないと思っています。皆さんとともに良い方向を導き出していきたい、そんなふうに思っていますので、今後とも会の運営にご協力をたまわりますよう、お願いを申し上げまして、閉会のことばとさせていただきます。